

## 1. 訪問日程及び訪問先

平成24年11月15日（木）～22日（木）

ブラジル連邦共和国サンパウロ州 詳細は「4. 主な訪問日程」のとおり

## 2. 訪問団メンバー

### ○鳥取県

鳥取県議会 伊藤美都夫議長、横山隆義議員、砂場隆浩議員、溝内係長

鳥取県 藤井喜臣副知事、生田文子教育次長、山下交流推進課課長補佐、堀本主事

### ○市町村

米子市（野坂康夫米子市長ほか1名）

鳥取市（深澤義彦副市長、中西照典議長ほか3名）

### ○民間

鳥取県ブラジル交流団体連絡協議会（12名）

## 3. 所感及び県政に対する提言

ブラジル鳥取県人会創立60周年記念事業として、サンパウロ州環境局森林院の協力を得て、同森林院内に「サンパウロー鳥取友好の森」を創設した。友好の森は3年前からブラジル鳥取県人会が今回の60周年記念事業として企画してきたもので、県人会をはじめ関係者のご尽力により盛大に記念植樹の式典が催された。

当初は200本を植樹する予定であったが、ブラジル、日本から当初の目標を上回る寄付金が寄せられ、300本を超える木々が植樹できた。鳥取県からの寄付が多かったためだそうで、母国である鳥取県からの厚意に謝意が示された。

ブラジル鳥取県人会の本橋会長は「記念植樹を待ち望んできた、今回植樹した木々が年輪を重ねて立派な木々になるのと同じく、ブラジルと鳥取の友好が末永く続いていくことを願う」と挨拶されたが、植樹されたのはMata Atlânticaと呼ばれる西海岸に広がっていた森林で見られた木々で、ブラジル政府とサンパウロ州政府が保全に力をいれていることから、今日的で、非常に意義深い事業と評価して良いであろう。

ブラジル鳥取県人会創立60周年記念式典は、ブラジルー鳥取交流センターにて開催された。会場に集まった方々の間の会話は主にポルトガル語でなされ、世代交代が進んでいるように思えた。県人会が創立60周年を迎え、世代を重ねる今日、日系人としてのアイデンティティの希薄化と、日系社会のコミュニティの縮小化が懸念されているだけに、記念式典に副知事、県議3人が参加したことは非常に好感を持たれたようだった。

こうした状況のなかで、ブラジル鳥取県人会は他の都道府県の県人会と比べて活発に活動されているという話を会場でうかがった。式典後の祝賀会では、傘踊りや銭太鼓など日頃からブラジルー鳥取交流センターで練習されている様々なグループがその成果を披露され、盛んな拍手を贈られていた。鳥取県に伝わる踊りや芸能を通して、鳥取県人会の皆さんが、母国鳥取県とのつながりを感じていただいているようで、文化的交流を、今後とも継続的に行っていく必要性を強く感じた。

県人会の皆様が様々な分野でブラジルを支える主要なポジションに就いておられることも、会員の皆様との会話の中で分かった。鳥取県人会は、本県とブラジルをつなぐ貴重な組織である。次世代が育ち、日系社会がブラジル社会の中での重要性が増すであろうから、本県の今後の発展のためにも、今後とも県人会との関係を強化していけば、経済連携で新しいビジネスチャンスを鳥取県にもたらしてくれることもあるので

はないだろうか。

鳥取県に派遣された県費留学生、海外技術研修員、中堅リーダーだった方々との意見交換も行った。

海外技術研修員制度及び県費留学生受入事業は、ブラジル在住鳥取県出身子弟に先端技術等の習得又は修学の機会を設けることで、ブラジルでの社会的、文化的、経済的地位の向上とブラジルの経済発展に寄与するための制度である。

海外技術研修員制度は昭和63年から始まった制度であり、これまでに34名が鳥取大学や県内の民間企業等で研修を受けている。県費留学生制度は昭和40年に始まり、59名が鳥取大学、米子高専、鳥取環境大学で医学、農学、建築等を学んだ。中堅リーダー制度は平成15年から始まった制度であり毎年相互に派遣と受け入れを行っているもので、平成23年までに10名をブラジルから受け入れ、民間レベルでの交流を行ってきた。

意見交換を通じ、派遣された方々が自分の父母や祖父母の故郷を自らの肌で感じ、大変貴重な経験であったこと、日本で学んだ技術、知識がブラジルで役立っていることを実感できた。加えて、日系企業がブラジル経済の中で大きな役割を果たすようになった今日、日本語の習得とともに日本に住むことにより学んだ価値観や文化が、ブラジルで日系企業に就業する際に大変役立っていることも分かった。ブラジル経済は目覚ましい発展を遂げ、今後さらに、サッカーワールドカップ、オリンピック、万博と高度経済成長を遂げるとの見方が強まっているだけに、本県出身のブラジル日系人が経済分野で活躍することを支援することは、本県経済の発展に大きく寄与するものと考えられ、効果の高い事業であると言えるのではなかろうか。充実させながら継続すべき事業と考える。

第二アリアンサ鳥取村は昔の日本人の生活の色濃く残る農村地帯であった。

第二アリアンサ鳥取村では、自治会、農場、日本語学校の視察や交流を通じ、そのことを強く感じた。

農場視察では、養鶏、牧場、トウモロコシの生産など大規模経営が行われていた。

今後、世界で食糧需要の増加が予測されており、また化石燃料に替わる「バイオエタノール」の普及が進む可能性もあることから、ブラジル農業には将来性を感じさせるものがあつた。海外技術研修員制度を活用して、農業分野における人材の育成を続けていくことも必要であろう。

第二アリアンサ鳥取村日本語学校は私塾的機関であり、学校の施設管理は第二アリアンサ自治会が行っている学校である。同日本語学校には、鳥取県から平成6年から継続して日本語教員1名（現在10人目）が派遣されているところであり、今回訪問した際には、関係者の方から日本語教師派遣制度についての継続に対する強い要請があつた。日系人にとって、先祖の母国の言葉である日本語を学ぶ貴重な場所であるとともに、日系人が150万人といわれる日系社会であるブラジルにおいて、日本語の習得は、就職に有利なツールになるのだという。

現在の第二アリアンサには31世帯の約140人の日系人が居住されているが、鳥取県関係者は3家族10名を数えるに過ぎない。本来は国が支援すべきで、財政規模の小さな鳥取県が突出して援助すべきではないのではないかという意見があることも承知している。しかし、鳥取県の支援がなければ、日本語学校の運営は立ち行かず、自

治会の運営など住民の生活に大きな支障を生じることが間違いないし、第二アリアンサ鳥取村が、鳥取県のブラジル移住の原点であり、サンパウロを中心に活動されている県人会の皆様にとっても、精神的支柱となっていることは否定できないのではないだろうか。そうすると、単純な経済合理性を持ち込むのではなく、アリアンサへの移住が県事業として展開されたことも含めて考えると、第二アリアンサ鳥取村に対し、引き続き支援し、交流を継続していくべきだと考える。

1億9,000万人（世界第5位）の人口を有するブラジルには、150万人の日系人が暮らし、日系社会は世代を重ねるにつれて拡大している。リーマンショック、欧州経済の低迷の影響を受けながらも、鉄鉱石やレアメタルなどの鉱業生産や砂糖、大豆、畜産などの農業が盛んであり、非常に可能性を持った国である。サッカーワールドカップ、オリンピックなどのビッグイベントの開催を控え、インフラへの投資が進行中であり、今後とも経済成長が大いに見込める国であることも今回の訪伯で確認できた。

ブラジル鳥取県人会との交流を核として、企業進出や事業連携などの経済交流を模索することは、鳥取県の経済発展に新しい可能性を寄与するものと考えられる。日本とは、12時間の時差があり、真逆の季節という地理的条件を逆手にとって、24時間対応のコールセンター等を相互補完的に運営したり、季節的に収穫出来ないものを栽培したりするなど新しいビジネスモデルの構築も、十分に検討する価値があると考えられる。

記念植樹の式典で、ブラジル鳥取県人会本橋会長の挨拶にあったとおり、鳥取県とブラジル鳥取県人会の交流は、植樹した樹木が年輪を刻むのと同じく、着実に交流を積み重ねていかなければならない。

#### 4. 主な訪問日程

月 日	行 程	
11/15 (木)	16:30~21:00 23:40	鳥取 → 関西国際空港 関西国際空港発 (EK317便、フライト時間11時間5分)  【機内泊】
11/16 (金)	05:45 10:15~19:30	ドバイ国際空港 ドバイ国際空港 → サンパウロ国際空港 (EK261便、フライト時間15時間15分)  【サンパウロ泊】
11/17 (土)	10:00~10:40 12:00~13:00 14:30~17:30 18:30~	開拓先没者慰霊碑参拝 (イビラプエラ公園) 昼食 記念植樹 (サンパウロ州環境局森林院森林公園内) ブラジル鳥取県人会との意見交換・歓迎会  【サンパウロ泊】
11/18 (日)	10:00~ ~16:00 18:00~	記念式典、功労者等表彰 (ブラジルー鳥取交流センター) 60周年祝賀会・アトラクション 日本移民資料館視察 鳥取県派遣経験者との意見交換会 (県費留学生・技術研修員OB・中堅リーダー等)  【サンパウロ泊】
11/19 (月)	07:55~08:55 13:30~14:00 15:00~	サンパウロ国内線空港 → サンジョセ空港 (JJ3740便) ミランドポリス郡役場訪問 アリアンサ鳥取村視察、日本語学校視察・課外授業 歓迎夕食会  【ホームステイ】
11/20 (火)	08:30 13:45~14:38 16:00~17:00 17:00~18:00	アリアンサ鳥取村離村 サンジョセ空港 → サンパウロ国内線空港 (JJ3745便) 在サンパウロ日本国総領事館表敬訪問 サンパウロ市内視察  【夕食後にサンパウロ国際空港へ】
11/21 (水)	01:25~21:15	サンパウロ国際空港 → ドバイ国際空港 (EK262便、フライト時間: 13時間50分)  【機内泊】
11/22 (木)	03:00~16:50 17:30~22:00	ドバイ国際空港 → 関西国際空港 (EK316便、フライト時間: 8時間50分) 関西国際空港 → 鳥取

## 5. 主な訪問結果

### 【1】日本移民開拓先没者慰霊碑参拝

ブラジル日本都道府県人会連合会により、サンパウロ市のイビラプエラ公園内に昭和50年に建立された日本移民開拓先没者慰霊碑を参拝した。

ブラジル日本移民の歴史には、言語、風俗、習慣が全く異なる地で、医者にもかかれずマラリアなどの風土病で倒れた移民や、祖国訪問を悲願としながら果たせずに亡くなられたりした苦闘の時代を生き抜いた先駆移民の皆さんがいることを忘れてはならない。そうした初期開拓移民の入植地で葬られた方々の少なからぬ墓地が、入植地の移転や家族の帰国などで祀る人がなくなり、雑草が生い茂り、無縁仏の墓地のようになっていることに心を痛めた日本海外移住家族会連合会の藤川辰雄事務局長らが中心となって1975年に建立された。以来、6月18日の「移民の日」には絶えることなく、この場所で慰霊祭が挙行されてブラジル日本移民の心情的拠点となっており、天皇皇后両陛下や皇太子殿下、橋本総理、小泉総理らをはじめ、鳥取県からも訪問団が訪れており、今回の訪問も、ここの訪問から日程を始めることとした。

慰霊碑に献花して、亡くなった移民の皆様の御霊に哀悼の誠を捧げた後、慰霊碑の地下にある霊廟に入り、祀られた平和慈母観世音菩薩木像、地藏菩薩像、過去帳を前に焼香し、手を合わせて冥福を祈り、記帳した。本橋会長に加え、連合会の役員の方々に参列いただいたが、参拝したこと、なかんずく参拝から訪伯の活動を始めたことを大変喜んでいただいた。



日本移民開拓先没者慰霊碑



慰霊碑前にて

### 【2】「サンパウロー鳥取友好の森」記念植樹

ブラジル鳥取県人会創立60周年記念事業として、サンパウロ州環境局森林院の森林公園に創立される「サンパウロー鳥取友好の森」での記念植樹式に参加した。

友好の森は、ブラジル鳥取県人会の創立60周年記念事業として発案された。県人会の山添源二第二副会長が森林院に37年間勤務し、前総裁も務めた生物学者であることから、山添副会長が中心となり、森林院との協議や来鳥して鳥取大学農学部や県林業試験場への相談、植樹への賛同者を募って準備を進められてきたという。

友好の森には、Mata Atlântica（ブラジル大西洋海岸林）の代表的な樹木60品種約300本を超える苗木を県人会員及び訪問団で植樹した。予定の200本を大きく超える本数となったが、鳥取県からの賛同者が予想以上に多かったことに負うところが多いそうである。

Mata Atlânticaとはブラジル大西洋岸側に位置し、北はピアウイ州から南はリオ・グランデ・ド・スール州までの南北5,000キロの17州に広がる熱帯降雨林を指す。

ポルトガル人のペードロ・アルヴァレス・カブラルがブラジルに上陸した1500年当時、

Mata Atlânticaの面積は130万km<sup>2</sup>と推計されているが、開拓に伴って大量に伐採され、現在は10万km<sup>2</sup>と、500年で8%にまで減少したとされている。それでも、約20万種類の生物が存在し、2万5,000種の植物が確認されており、生物多様性ではアマゾンを超えていく。山添副会長らは、ブラジル政府やサンパウロ州が、Mata Atlânticaの保全と回復に懸命になっていることに加え、初期移民が開拓した原生林の多くがMata Atlânticaであることから、友好の森は、鳥取に生息する樹種も検討されたが、Mata Atlânticaの樹木にすべきだとの結論に達したという。

植樹する樹木の確保には、県人会に加え、森林院が全面協力。同森林院本部の横の芝生の広場という絶好の場所も森林院から提供していただいた。



植樹会場の様子



伊藤議長は「イペの木」を植樹

植樹記念式典では、本橋会長が「鳥取県人会が創立して60周年、人間でいえば還暦の年に当たり、新しい出発にするためにも、記念植樹を心待ちにしていた。木は年輪を刻む。県人会も木と同じように年を重ねていきたい」と挨拶され、訪問団を代表して伊藤議長も「第64回全国植樹祭が来春、鳥取県で開催される。『森は海の恋人』といわれるが、森をつくることは国をつくることであり、国土の原点は森づくりにある。今回の植樹の木が大きく育つと同じく、サンパウロと鳥取の友好がさらに深まることを望みます」などと話した。



植樹記念式典



植樹記念式典で挨拶する伊藤議長

ブラジルと鳥取県との交流が末永く続くことを願い、鳥取県から贈呈される「麒麟獅子」の頭をモチーフとした木工品の披露が行われた。今回植樹した樹木は同森林院と県人会が協力して管理していくことになっている。

訪問団の3人が各自植樹した後、ブラジル鳥取友好議員連盟分からの2本植樹したが、「Paineira Rosa」「Aldrago」の2本を植えた。平井知事分は「ブラジルの木 (Brazilwood)」。芯材から紅色染料 (ブラジリアン) が得られるため、大量に伐採されてヨーロッパに輸出されたため激減。IUCNの絶滅危惧種とされているが、ブラジルの

国名も、この木に由来する。このため、知事の木は、どうしても、ブラジルの木でなければならないと県人会の皆さんがこだわられたため、知事の木は苗木の搬入が遅れ、関係者がヒヤヒヤする一幕もあったが、無事、皆さんと植樹を終えた。



贈呈された麒麟獅子の頭



植樹協賛者の名前が刻まれたプレート

### 【3】ブラジル鳥取県人会との意見交換会

サンパウロ市内で、ブラジル鳥取県人会の会員約60名との意見交換会も開催した。ブラジルの経済や日系社会の現状と課題、鳥取県への思い、ブラジル日系社会や鳥取とブラジルの友好連携の今後などについて、様々な話をお聞きすることができ、県人会の皆様と懇親を深めるだけでなく、今後、ブラジルとの友好関係を深める必要性を改めて実感することができた。

その中でもおもしろいと思ったのは、24時間対応の事業展開が様々な分野で進んでいるが、その反面、夜間深夜に専門知識を持った人材の確保が課題として浮上している。鳥取とサンパウロの時差が12時間あることから、今後進展するであろうIP電話などのICTを利用すれば通信費はゼロのため、鳥取とサンパウロで12時間ずつ業務を分担することはできないのだろうかというアイデアだ。パソコンや保険、製品のカスタマーズセンターのほか、医療や法律の関係の相談、さらにはブラジルの教育費は非常に高く塾に通う生徒が多いので、その質問を受けるネット予備校など、適用範囲は極めて広いのではないかというのだ。その一方で、この提案を実現するには、ブラジルのIT環境がまだまだ遅れているなどの課題も多く聞かせていただき、すぐに実現できる話ではなさそうだが、しっかりと交流を深めていけば、ビジネスチャンスがいくつもあり、夢は広がった。

### 【4】ブラジル鳥取県人会創立60周年記念式典

ブラジル鳥取県人会の活動拠点となっている「ブラジルー鳥取交流センター」であったブラジル鳥取県人会創立60周年記念式典にも参加させていただいた。

ブラジル鳥取県人会は昭和27年の鳥取大火に際し、未曾有の郷土の大火へ義捐金を集めようと、鈴木栄蔵（すずきえいぞう）氏、徳尾恒壽（とくおつねとし）氏らが中心になって設立されたという。

記念式典では、日伯両国国歌の斉唱で始まった。鳥取の風景を紹介し、平井知事が「皇太子殿下と鳥取の傘踊りを見させて頂いた移民100周年記念式典は懐かしい思い出です」などと述べるビデオメッセージが放映され、伊藤議長、藤井副知事ら挨拶に立って、祝意を表した。

伊藤議長は、「気候、風土、言語、習慣が異なるブラジルで様々な困難に打ち勝ち、

粉骨砕身の努力を持って今日の繁栄と確固たる地位を築いてこられた先人及び県人会の皆様には敬意を表し、県人会の今後の発展を祈念する」と述べた。

ブラジル鳥取県人会長からは、母県である鳥取県からの支援や交流活動に対する謝意が述べられるとともに、今後も引き続きの支援、交流継続の要請があり、永年の県人会活動に功績のあった特別功労者2名、功労者8名、高齢者2名の知事表彰を行い、副知事から表彰状と記念品も伝達した。

受賞者を代表して挨拶した加藤恵久さん（72）は、県人会の理事、副会長、会長を歴任し、県系人の福祉や生活の向上に尽力されただけでなく、日系社会最大の行事である「日本祭り」の実行委員長を2005年から4年務められたことが功績として高く評価され、特別功労者としての表彰となった。加藤さんの謝辞は「遠く鳥取からおいでいただいたことに感謝するとともに、鳥取に帰って鳥取県人会が頑張っていることを皆さんにお伝えいただきたい」という感謝の気持ちを表したものであった。訪問団からのブラジル鳥取県人会への記念品、県議会からの激励金も、本橋会長にお渡し、県民歌「わきあがる力」を全員で合唱して、式典は幕を閉じた。

ブラジルー鳥取交流センターでは、絵画、書、俳句など約30の文化講座が開講されている。訪問時には60周年記念の展示会が開催されており、式典後、見学させていただいたが、どれも、日本の伝統や文化をしっかりと意識した力作ばかりで、郷土鳥取の風景を描いた絵画もあり、改めて、郷土鳥取への思いの強さも認識させていただいた。鳥取県からの補助を受けて新設された消火設備の披露があり、建物の壁に向かって放水し、水のアーチを描いた。



記念式典



ブラジルー鳥取交流センター

記念式典後、記念祝宴も開催され参加させていただいたが、横山議員、砂場議員の祝辞に続き、ケーキカット、鏡開きと続き、創立60周年を皆で祝した。会場の中では、県人会所属サークルの芸能披露等が行われ、傘踊りや歌など、日頃ブラジルー鳥取交流センターで練習されている各グループが成果を披露し、大きな拍手を浴びておられた。訪問団も傘踊りに参加し、銭太鼓も披露して会場を大いに沸かせた。

ブラジルー鳥取交流センターでは、絵画や書に加え、「しゃんしゃん傘踊り」「サンバ」などの芸能教室も開かれている。特に、しゃんしゃん傘踊りは県人会を超えて、日系人社会に広がっているという。同センターがサンパウロにおけるブラジル鳥取県人会の重要な活動拠点であると同時に、世代を重ねるごとに日系人としてのアイデンティティが希薄化し、コミュニティの縮小化も懸念されている中で、自分が日系人であり鳥取県とつながりを持っていることを確認する場となっていると、県人会の皆様から聞かされ、同センターの事業の役割の大きさを再認識させていただいた。





記念祝賀会での鏡開き



祝賀会での芸能披露

会場の外では、ガーデンパーティーのような雰囲気でも、県人会員や関係者の皆様と様々な話をさせていただいたが、県費での留学や研修を体験した30代、40代の方々の話が印象的だった。

鳥取で研修したことで、業務に対応できるレベルまで日本語が上達し、ブラジルへ進出した日系企業で勤務することが出来るようになったと喜んで居られた。ブラジル経済は日系企業が支えている部分が多く、日系企業で働くことは経済的な意味に加え、日系人としての自己実現、さらにはキャリアアップの意味も大きいという。ブラジル経済界でこうした皆様が増えていけば、将来的には鳥取との経済連携が深まり、鳥取経済の発展に資するものであらうと感じた。

子どもたちに鳥取の風景を一度見せたいと語るお母さんもいた。経済的には自分で負担できるが、鳥取の学校などを訪問するなどの交流が期待できない単なる観光旅行はしても意味がないと話され、鳥取の小中学校とサンパウロの学校が友好提携し、学校で一緒に演奏したり、スポーツを楽しんだり、ホームステイできるような企画があれば、ぜひ参加させたいと言われていた。日系人の子弟は簡単な日本語なら解する人が少なくないので、こうした子どもたちとの国際交流も他国よりは実り多いものとなるのではないかと。教育委員会、地元の旅行代理店と相談をしてみたい。

鳥取で医療研修して10年近く経ったが、医学・看護の進歩は日進月歩であり、もう一度、ブラッシュアップの研修をしたいという方も居られた。IT関係の企業で研修された方も同様の意見を話されていた。以前あった短期研修員制度を復活して対応してもいいのではなかろうか。

## 【5】ブラジル日本移民資料館

ブラジル日本移民資料館は、ブラジル移民70周年を記念して昭和53年6月に開館し、ブラジルにおける日本移民の暮らしぶりや社会的な背景を紹介する資料館である。移民社会を理解する貴重な施設となっていると聞き、見学させていただくことにした。

資料館の職員の案内で遺品や写真などを見学させていただいたが、移民初期に、コーヒー農場で契約労働者（コロノ）として働いていた日本移民は、言語も分からず、過酷な労働と慣れない気候に耐えながら生活した様子には胸が痛んだ。



ブラジル移民資料館にて説明をうける



ブラジル移民資料館を訪れた訪問団

ブラジルで食べられる野菜の多くは日系移民が持ち込んだものであることも初めて知った。生野菜を食べる習慣がなかったブラジルで、気候に適合するよう失敗を重ねながら品種や栽培技術の改良を行った結果、野菜サラダが普通に食卓に並ぶようになった経緯などの展示を見つつ、日系人はブラジルにとって大きな存在感のあることを改めて認識した。

## 【6】鳥取県派遣経験者との意見交換会

留学生、研修員、中堅リーダーとしてこれまでに鳥取県に来県したことがある方々と意見交換会も開催した。

県費留学生の制度は昭和40年に、海外技術研修員の制度は昭和63年に設けられた制度であり、本県出身の日系ブラジル人が本県にて技術や学問を学んでいる。中堅リーダーの制度は平成15年に設けられ、1年ごとにブラジル鳥取県人会と鳥取県が中堅リーダーを相互に派遣する事業だ。意見交換会には、県費留学生4名、海外技術研修員4名、中堅リーダー7名の計15人に参加していただき、意見や思いをお聞かせ頂いた。

まず、本橋会長からは、県費留学生の制度と海外技術員の両方の制度を続けている都道府県は十数団体あるものの、自治体財政の逼迫に伴い相次いで廃止されていると指摘され、これからも続けて欲しいと強い要望があった。次いで、留学生と海外研修員を代表して各1名の方が研修成果などについて発表した。

県費留学生のアンドレ・コウジ・ニシザカ氏（H22年度 鳥取大学医学部口腔外科）は「日系3世です。鳥取大学に留学し、歯科口腔外科にて歯の治療について学んだ。最先端の治療を間近で見ることができただけでなく、学会での発表の機会も作っていただき、感謝している。医療機器も素晴らしいと感謝している。現在では歯科医院をサンパウロで開業しているが、米子で大山を仰ぎ見ながら暮らした日々は忘れがたい」などと話された。

海外技術研修員だったアレシャンドレ・アラキ氏（H21年度 中海テレビ）は「私も日系3世です。中海テレビでカメラマンの研修を受けた。毎日、社員と一緒に出かけ、映像を撮り、編集し、その映像がニュースになった。日南町が故郷であり、研修を受けたときに先祖の墓参りにも行った。研修は本当に忙しかったが、実り多いものであった。特に大山寺で正月行事のカメラ取材をしたときは大変寒かったことを今でも覚えている。これからも研修制度が続いて欲しい。今、県人会で理事を務めさせていただいているのも、研修をきっかけに鳥取県とブラジルのために頑張りたいと深く思うようになったからだ」と研修を振り返られた。



鳥取県での留学成果を発表する  
アンドレ・コウジ・ニシザカさん



鳥取県での研修成果を発表する  
アレシャンドレ・アラキさん

二人の意見発表の後は、各テーブルに分かれて意見交換をしたが、県費留学生らは一様に鳥取での生活を懐かしんでおられたが、鳥取で学んだ後、日系企業に転職を果たされた方もおられた。日系企業はブラジル経済の中で重要な位置を占めているばかりではなく、給与水準、技術水準も高く、キャリアパスとしては、とても有効だそうで、「もし、鳥取で学ぶことがなかったら、今の人生はなかった」と話す方もいた。

県人会の皆さんが、県費留学を通じてブラジル社会の中で羽ばたけるとしたら、極めて有意義な制度であり、鳥取とブラジルの連携の礎となって、鳥取県にも将来、恵沢をもたらすだろうと確信に近いものを持てた。

### 【7】ミランドポリス郡庁舎訪問

鳥取県は大正15年(1926年)、サンパウロ州ミランドポリス郡に3,000町歩の土地を購入して移住者を送り出した。移住地は「アリアンサ」と呼ばれたが、ポルトガル語で「協働」「同盟」の意味だそうだ。鳥取県が購入した土地は、先に土地を購入し移住者を送り出していた信濃海外協会(長野県)の隣接地だったため、第二アリアンサ鳥取村と命名された。いわば鳥取とブラジルの連携の原点というべき地であり、サンパウロの次の訪問地を選んだ。

アリアンサはサンパウロの北西約600kmに位置する。朝6時にサンパウロ市内のホテルを出発。サンパウロ・コンゴニャース空港から1時間のフライトで、サンジョゼ・ド・リオ・プレト空港に到着。さらにバスで4時間かけてアリアンサのあるミランドポリス郡に到着した。サンジョゼ・ド・リオ・プレト飛行場からアリアンサへ続く沿道は、地平線まで見渡す限り山一つない広大な平原で、さとうきび畑と牧場が延々と広がっており、ブラジル農業の規模の大きさを実感するとともに、原野を切り拓いた先人の苦労は想像を絶するものであろうと改めて感じた。



アリアンサへ向かうバスの車窓にて 見渡す限りの農場

ミランドポリス郡役所はバスセンターと同じ建物の中にあった。郡役所というより、村役場というような素朴な感じの庁舎だった。ミランドポリス郡は面積約918km<sup>2</sup>、人口2万7,000人。富山県高岡市と友好都市提携をしている。日本移民の入植地でもあり、多くの日系人が暮らしており、これまでに2人の日系郡長が誕生している。



ミランドポリス郡庁舎



中央がロドリゲス郡長

郡庁舎にジョゼ・アントニオ・ロドリゲス郡長を表敬訪問したところ、笑顔で出迎えてくれた。ミランドポリス郡の説明を受けた後、日系人郡議、第二アリアンサ鳥取村の自治会役員の皆さんも懇談に加わっていただき、和やかなひとときを過ごした。

## 【8】第二アリアンサ鳥取村 ①村の開拓者子孫後援計画地

第二アリアンサ鳥取村では移住した当時の建物がある一角を「村の開拓者子孫公園」として整備する構想が持ち上がっていた。アリアンサへの移住者が移住直後に家を構えるまで仮住まいとして住んでいた建物や、移住者の世話をしていた組合職員が住んでいた小屋を、当時の姿に戻し、史料などを展示するとともに、アリアンサを出て、サンパウロやリオ・デジャネイロで暮らしている子孫たちがアリアンサに帰ったとき、集う場所にしたいということだった。



入植直後に住居ができるまで住んでいた建物

これら建物は、第二アリアンサの移住の原点ともいえる場所であり、ロドリゲス市長も構想に理解を示されているということ。今後、自治会を中心に整備が進むことを期待したいと思う。



組合職員が住んでいた建物



第二アリアンサの最初の入植地点を示す記念碑

第二アリアンサを含めて現在のアリアンサ全体の人口は、最盛期の10%程度という。戦前は開拓の過酷さ故に、新天地での夢敗れてアリアンサを去った人が数多くおられたことに加え、戦後は、移住者子弟の高学歴指向によるサンパウロ市など都市部への若年層の流出が、人口減少の理由という。都市部への人口流出の結果、農業後継者不足も顕著で、都市部に若者が流出する傾向は日本と同じと感じた。

## ②第二アリアンサ鳥取村の各農場

第二アリアンサ鳥取村で農業を営まれている入植者の皆さんの農場も見学させていただいた。

### (ア) 大森農場

三重県から1927年、大森一城さんが移住され、米作りを始められた大規模農場で、現在の経営者は息子の大森聖也さん。120ヘクタールの牧場で500頭の牛を肥育されているほか、食用トウモロコシなどの野菜を50ヘクタールの農地で作られている。トウモロコシは三毛作で栽培し、葉や茎は細かく切断して、牛の飼料になる一方、牛の糞は発酵して肥料にするエコサイクルが確立していた。



大森さんの経営する牧場



大森さん（右から5人目）と訪問団

### (イ) 佐藤農場

長野県から佐藤寅芳さんが移住して開拓され、現在の当主は勲さん。24ヘクタールの農場には、パパイヤ、マンゴー、アボカド、ジャガなどの果樹の木が栽培されているほか、ゴムの木も育てられていた。ゴムの木は、幹に切り込みを入れ、そこから垂れる樹液を集め天然のゴムとなる。知識としてはあっても、目にするのは初めてだった。勲さんはブラジル移住、特にアリアンサでの歴史に係る史料を収集し、展示されていた。鳥取県議会から訪れた歴代の訪問団の写真もあった。



ゴムの木



同氏が収集している移住に係る資料

## (ウ) 中尾農場

中尾秀隆さんは第二アリアンサ鳥取村で今も頑張っている鳥取出身の3軒の農家のうちの1軒だ。



鶏舎



鶏卵の洗卵する機械

メインは養鶏で、1万3,000羽を飼育されており、鶏卵を出荷されている。鶏舎の屋根にはスプリンクラーが設置されていた。気温が上昇したときには散水して、鶏舎を冷やすのだという。養鶏の他に50ヘクタールの牧場で100頭の牛も飼育されていた。

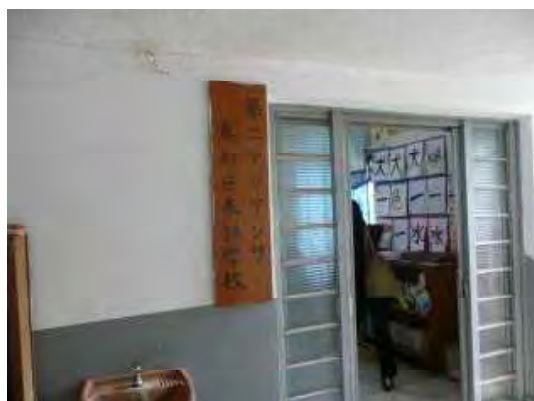
## ③第二アリアンサ鳥取村日本語学校

第二アリアンサ鳥取村日本語学校は正式な学校ではなく、私塾的機関であり、学校の施設・管理は第二アリアンサ自治会が実施している学校である。

平成3年に指導していた日本語教師が亡くなり、日系人子弟の日本語教育に支障をきたしたことから、平成5年にブラジル鳥取県人会から鳥取県知事へ日本語教師派遣の要請があり、翌平成6年度から日本語教師を派遣している。

原則として第二アリアンサに住む日系の子どもと希望する成人で、現在は、日本語のレベルごとに5クラスに分け、幼児から高校生まで21名が学んでいる。県から派遣されている教員は1名。派遣期間は2年間で、現在は鳥取市立美保南小学校に勤務していた藤山馨教諭が今年6月から勤務しているが、藤山教諭で鳥取県からの派遣は10人目という。

日本語学校で、訪問団の県教委の生田次長が、鳥取からお手本、筆、半紙、硯、墨汁をスーツケースに積んで持ち込み、習字の特別授業をした。学んだのは日本語学校で学ぶ児童生徒のうちの9才から16才までの12名で、「平和」の二字に挑戦した。初めて筆を使った生徒も居たが熱心に習字を学んでいた。



第二アリアンサ鳥取村日本語学校



出席した生徒達（12名）



生田次長による習字の授業



現在派遣されている藤山教諭（左端）

日系人にとって、母国語の日本語を学ぶことは、アイデンティティを維持するだけでなく、将来、職業を選択するときにはブラジル経済を支える日系企業への就職が有利になるという側面もあるという。アリアンサの多くの日系人は日本語学校の必要性を訴え、鳥取県による教師派遣の継続を強く懇願されていた。

#### ④第二アリアンサ鳥取村自治会主催の歓迎会

第二アリアンサ鳥取村自治会の皆さんが自治会館で歓迎会を開いて下さり、訪問団は喜んで参加させていただいた。

第二アリアンサ鳥取村の佐藤自治会長の「日本語教師の派遣をはじめ鳥取県の多大な支援について心から感謝している」との挨拶で歓迎会は始まった。自治会館も鳥取県からの援助で建設されたもので、結婚式の披露宴に加え、教師の日、父の日、子どもの日などには手作りの料理を持って住民たちが集まるのだそうで、地域コミュニティーの拠点になっているという。

伊藤議長も「第二アリアンサ鳥取村は鳥取県からの入植の原点。今後とも、鳥取県とアリアンサ、日本とブラジルとの友好を図っていきたい」との挨拶。集まった住民から大きな拍手を贈られた。



歓迎会で挨拶する伊藤議長



歓迎会に参加した村民の皆さん

住民の方々が鳥取県からの支援に心から感謝されているという思いが強く伝わってきた。壁には天皇皇后両陛下の写真と並んで平井知事の写真が飾られていた。ブラジルとの交流に熱心だった西尾知事の次に知事に就任した片山知事は、ブラジルを訪れていないが、平井知事は日系移民100周年記念事業で訪伯しており、アリアンサも訪れている。自治会館建設支援や日本語教師派遣に加え、こうした人的交流への感謝の思いが写真になっているのではないだろうか。



自治会館には平井知事の写真が両陛下  
の写真と共に掲げられていた。



歓迎会の料理は、自治会婦人部の  
心のこもった手作りだった。

そういう意味で、鳥取県議会からも何度も議員団が訪れていることも、意味が深いと感じた。自治会女性部の皆さんの手作りの料理に舌鼓を打ちつつ、自治会の皆さんから、ここでの暮らしの様子、鳥取への思いなどを聞かせて頂いたが、「母県」という言葉が何度も繰り返され、「鳥取県は皆さんのことを忘れていない」というメッセージを発信しなければいけないとも強く思った。また、鶏肉は日本へ輸出しているものの、牛肉の輸出が出来ないことを悔やんでおられる方も少なくなかった。口蹄疫は人間では発症しないが、日本は口蹄疫の発生した国からの牛肉および乳製品の輸入を禁止しており、ブラジルや隣国のアルゼンチンでは口蹄疫を発症する牛が後を絶たないため、これだけ畜産が盛んでありながら、全く輸出できないのだという。

アリアンサ鳥取村日本語学校の生徒と訪問団はしゃんしゃん傘踊りの輪をつくり、「ふるさと」をみんなで合唱して歓迎会はお開きとなった。訪問団は2名ずつに分かれ、村民の方の自宅にホームステイさせていただいたが、各家庭でも歓迎され、様々な話を深夜まで聞かせて頂いたうえ、手作りの朝食をいただくという温かい歓迎を受け、感謝に堪えない。改めてお礼を申し上げたい。



訪問団と傘踊りを踊る日本語学校の生徒達



訪問団と日本語学校の生徒達

## 【9】弓場農場

第一アリアンサにある弓場農場も訪問し、1963年に20歳で参加した矢崎正勝さんに案内して頂いた。

弓場農場は、家族10人と1926年にブラジルに渡った弓場勇さんが、広大な原始林に感動し、「日本人の特徴を活かした新しい文化を創造しよう」という大きな夢を掲げ、仲間たちと「耕し、祈り、芸術する」共同農場を1935年に開設したことに始まる。様々な困難に立ち向かい、一度は破産も体験したが、それでもお互いに助け合い夢の実現に



邁進し、日本から新しく彫刻家の小原久雄さん、バレリーナで夫人の明子さんが1961年に加わったことから、絵画、演劇、バレエなどの芸術の花が一気に咲いたという。

農場では日系1世から4世までの約30家族約60人が共同生活を営んでいるという。約8,000本のパイナップルやマンゴーなどの果樹を栽培して近隣の町へ出荷しているほか、椎茸や野菜の栽培、養鶏や養豚などを手がけており、米を少し買うくらいで、自給自足の生活をされている。

弓場農場の最大の特徴は芸術活動にある。モダン・バレエのほか、合奏、合唱、演劇などの舞台芸術には定評があり、クリスマスには農具倉庫が「テアトル・ユバ」と呼ばれる500人収容の劇場となって一般公開されるという。バレエなどの舞台公演は、これまでに公演回数は海外公演も含め900回を超えるといい、唐十郎一座や現代座、劇団1980など日本の劇団がテアトル・ユバで公演したこともあるという。



テアトル・ユバ



野外展示されている小原久雄さんの遺作

## 【10】在サンパウロ日本国総領事館表敬訪問

ブラジル連邦共和国の経済情勢や日本との外交課題等について、在サンパウロ日本国総領事館の福嶋教輝総領事、経済担当の坪井俊宣領事と意見交換を行った。

坪井領事らの説明は以下のようなものだった。

ブラジルの人口は1億9,000万人で世界5位。移民が多く、その中でも日系人は150万人で最大で、世界一の親日国といえる。GDP成長率は2010年には7.5%、2011年には2.7%、本年の予測は1.54%と、成長率が低くなっているのは欧州経済危機の影響によるものと分析している。しかし、2014ワールドカップ、2016リオデジャネイロオリンピックが開催予定で、サンパウロは2020年の万国博覧会の開催候補地の一つになっているうえ、大規模な深海油田が発見され埋蔵量も有望とわかった。今後10年は高度経済成長が期待できる黄金の10年になると思われる。

経済発展の阻害要因としては、インフラの整備不足がまず挙げられる。特に都市部の道路整備が遅れており、鉄道網の整備も進んでいない。空港から市街地の中心部、港からの荷物の運び出しなどで整備が待たれている。警察と犯罪組織の抗争事件も発生し、治安の悪化が懸念されている。ブラジルコストといわれる高コスト体質も問題だ。税金と物流コストが高く、大量輸送を可能とする鉄道網などの整備がされなければ解決できない。

ブラジルと最も密接な経済関係を築いているのは中国。輸入、輸出ともトップだ。中国の狙いは食料と鉄鉱石等の豊富な天然資源と見ている。韓国の自動車会社の広告もブラジル国内で多く、ブラジル市場に注目していることがうかがえる。

日本は歴史的に深い経済関係がある。技術力には絶対的な信頼が寄せられていて、日

本からの投資意欲も旺盛である。日系人の勤勉さ、嘘をつかない真面目さにも定評があり、日系人が薬局と会計事務所を開いたら、周囲の薬局と会計事務所は店を閉めるとまで言われている。

現在、高速鉄道の整備（リオデジャネイロ～サンパウロ間）の計画があり、日本企業をはじめフランス・ドイツ・中国など各国が注目し売り込みを図っているところである。

農業、政治、インフラ整備等の事項について意見交換を行ったが、ブラジルが経済のパートナーとして非常に重要であることを改めて確認した。



在サンパウロ日本国総領事館での意見交換



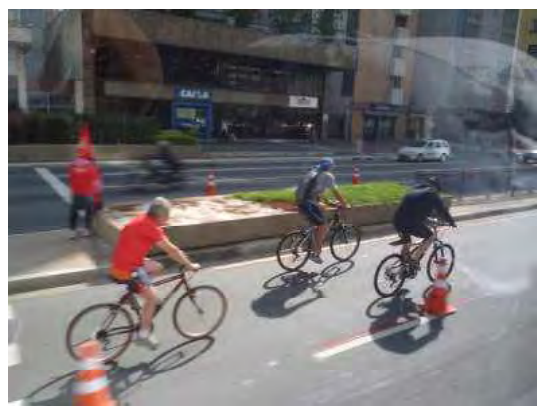
福嶋総領事（左端）・坪井領事（中央）

## 【11】車窓から

車窓から見た風景で、報告しておきたいものが2つある。ひとつは日系人の芸術家オオタケ・ヨシエさんが制作したオブジェである。今、ブラジルでは日系4世、5世も珍しくない。このオブジェは、ブラジルの日系社会が4世の時代になったことを表現したものだそうだ。道路の中央分離帯にこのような大きなオブジェがあることは都市景観からいっても、非常におもしろいと感じた。



日系社会を表現したオブジェ



パウリスタ大通りの自転車専用コース

サンパウロの中心を走るパウリスタ大通りは、休日と平日では様子が一変する。観光バスや貸し切りバスは平日は通行が禁止されているが、休日はその制限が解かれる。また、パウリスタ大通りは片側3車線の大きな道路だが、休日は、そのうちの1車線が自転車専用コースになっていた。サンパウロ市は健康増進に自転車を奨励しており、自転車の普及のための取り組みのひとつだという。交差点などにはボランティアも配置し、安全にも配慮していた。